イスラム社会に触れて（ヨルダン、エジプト）

吉田　博至（JECK会員）

始めてイスラム圏ヨルダンに赴任したのは1999年10月、それから2004年まで通算4年滞在し、昨年エジプトに3ヶ月滞在、少しはイスラムの人々、文化に馴染む事ができたので、その一端をエッセイ風に紹介したいと思います。

ヨルダンは北海道より少し広い面積で、人口は550万人、イスラム教徒93％の国、朝4時前後から最初のアザーン（お祈り）が始まる。モスクから聞こえる大きな声で起こされ、日に5回もこれを聞くことになる。ダウンタウンを歩くと、さらにイスラムの国に来た自分を感じた。あちこちから視線を浴び、自分が外人であることを知らされ、緊張が走った。しかしそのうち、ヨルダン人の親切心がだんだん分かってきた。彼らと付き合うのは、まず自分が笑顔を見せることだと分かった。「アナ・ヤパーニ（私は日本人）」というと、笑顔が返ってくる。それからである。いろんなところに「サラーマ・アレイコム（今日は！）」と笑顔で入り込み、自分の好奇心を満たしだした。そのうち、ヨルダン人の家庭に招かれる機会がたびたび出てきた。驚いたことに子供の数の多いこと、子供たちは行儀よく、よく働き、家事を助けている。家庭における父親は絶対で、威厳に満ちている。家族、親戚、同族といった関係を大切にしている上、信仰心が深いため、犯罪が少ない。

イスラムでは自分は貧しくても、人を助けよ、人に与えよ、というイスラムの教えの根底にある日常の行動が、人を尊ぶ精神の表れのような気がする。

その一方で「目には目を」という教えもあるため、ひどいことをされた相手には徹底的に復讐する。その憎しみは消えることなく、自爆テロなどを生み出している。イラク戦争などで殺された何万人のイラク人の周辺には何十万人の復讐への怨念が渦巻いていると思える。こういった事象を考えると、イラク戦争が果たしてテロ撲滅に貢献しているのか疑問になり、戦争がテロを生み、テロがテロを生む悪循環連鎖に陥っているように思える。

イラク戦争の発端が大量破壊兵器保有という誤解であったが、昨年もイスラム人の人々への誤解や偏見に起因する出来事があった。それはデンマークで起きたイスラムの風刺漫画事件である。あの時、私はエジプトのカイロにいたが、イスラム社会からの反発として、ヨーロッパ製品の不買運動が起こり、あっという間にスーパーマーケットや商店からヨーロッパ製品が見事に消えた。これも「目には目を」を徹底的に実践した事象である。

エジプトは日本の面積の約3倍、人口7,000万人、イスラム教徒90％、首都カイロはヨルダンの首都アンマンに比べると、はるかに大都会であり、2,000万人の人口を有する。カイロには日本が協力した地下鉄が走り、オペラハウスもあるが、残念ながら日本が協力したことはあまり知られていない。新しい建物が次から次へと建設され、会員制のすばらしいゴルフ場もある。ゴルフ場を取り巻くように豪邸が建築されていて、なんとゴルフ場の出口トンネルは大理石で囲まれている。これが各国から援助を受けている国なのかと疑いたくなる。確かにエジプトは貧富の差が大きい。小さな女の子が学校にも行けないで絨毯工場で働く姿や、大きな荷物を運んでいる少年達の姿は日本ではまず見ることはない。貧しい若者の国外出稼ぎも多く、ヨルダンでも多くのエジプト人労働者を見かけた。ヨルダンは諸外国からの援助に大半を依存しているため、それに甘んじて3Kのような労働を嫌う。この穴埋めをエジプト人やスリランカ人等がやっている。エジプト人は貧困から抜け出す努力を各地で行っており、それがエジプトのエネルギーとなっているように感じられ、ヨルダン人のエネルギーをはるかに上回っているように思う。

私が異文化であるイスラムの人たちに触れた結果、敬虔な信者が多く、優れた文化を持っている人達であり、我々日本人を含め、世界がイスラムの人達を理解し、誤解を無くして、平和に共存してゆくことこそ重要であると強く感じている。

「国際交流フェスティバルの出展に関しての私の意見」

後藤　隆郎（JECK会員）

過去6年の相模原、その他、横浜、地域の公民館等のフェスティバルに参加して過去のJICA専門家の体験を通して専門家の広報に努めてきました。

毎年、各主催者の考えも変化し相模原市では国際交流フェスティバル、市民まつりの他に2005年から環境まつりが開催されています。今年は子供への教育的観点からスタンプラリーでは各コーナーで子供に分かりやすく説明し、その上でスタンプを押すよう主催者から要望されました。このように社会の変化を感じます。

従って、フェスティバルですから堅い話をするのでなく来訪者によって説明の仕方を変える必要があると思います。特に子供の場合は分かりやすく、学生、大人は専門語を使うなどJECKの広報のためには、主催者が何を求めているのかもう一度検討すべきと思います。

私の場合、農業ですからJICAの仕事は勿論の事、コショウ、カムカムの栽培から見た地球の温暖化と環境問題、毎日使用している白コショウと黒コショウの違いなどを説明し私たちの生活上の知識として説明をしております。ほとんどの人が知りません。体験学習として諺「胡椒の丸呑み」を説明するためにコショウの粒を噛んでもらっております。子供が理解できるように教育的観点から漢字にはひらがなを付し、A4の紙にコショウの歴史、コロンブス、JICAの功績を記述し配布しております。そしてプロジェクトの持続的発展の結果ドミニカ共和国のコショウの見本、国内でのカムカムの販売へ繋がっていることを説明しております。販売することは発展途上国への支援であり専門家で終わったのでなく、去る5月にはJICAから派遣者への助言が求められ説明をしました。従って、展示の説明と物品販売は途上国を支援するというグローバルな考えで出展してきました。しかし、JECK会員の中には出展、物品販売を物好きな人間がやっているという見方をしておられる方がいると伺いました。物品販売という一端をとらえ発言するのではなく発展途上国の支援に対しJECKは何ができるのかグローバルな考えが必要と思いますが如何でしょうか。

出展について、来訪者へ一人でも多く理解してもらうためにはどのような行動が必要なのか検討する必要があるのではないでしょうか。JECKの広報として機関紙の発行、催物への出展などあります。私個人に何が出来るかと文献、資料の作成にはJICA、JECKの名前をいれて広報に努めてきました。しかし、そのJECKの名前を使用するには組織だから理事会の承認が必要とのことですが、その都度連絡はしてあり拘束的な考えと思います。

役員会でどのようなことが討議されているのか出席していないので私には分かりませんが、上記の私は、展示と物品販売は一体で関連性のあるものと考えており、JECKの理事に意見の異なる方がおられる事は私の出展を否定しているのではないでしょうか。もう少しそれぞれの専門分野について理解をお願いいたします。最後にJECKのご発展を祈念いたします。

以上